

Care workers' approach to elderly people with
emotional, cognitive and behavioral dementia
この論文をさがす

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-08-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大西, 奈保子, Onishi, Naoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.50818/00000071

研究報告

認知症高齢者の情動・認知・行動に 対する働きかけ

Care workers' approach to elderly people with emotional, cognitive and behavioral dementia

大西奈保子

Naoko Onishi

要 旨

【研究目的】 認知症高齢者の情動・認知・行動に対して介護者がどのような働きかけを行っているのかについて、認知症高齢者の介護場面を観察することから明らかにする。

【研究方法】 介護職者6名に対して6名の研究者が、日中の6時間程度、参与観察を行い、その内容を細かくフィールドノートに記載し、疑問に思ったことなど対象者にインタビューを行った。参与観察とインタビューから得られた記録から、介護職員が認知症高齢者の情動や認知に働きかけて「その安定や変容を図っている」と記述された部分や「行動の習慣化（行動がスムーズに行っている）」と記述された部分を抜きだしてカテゴリー化した。

【結果・考察】 認知症高齢者の情動・認知・行動に対する介護者の働きかけとして、「行動を促す」働きかけと「安心感を与える」働きかけが明らかとなった。行動を促す働きかけは、＜言い方の工夫＞、＜声かけをして指示をする＞、＜できる役割を与える＞、＜機嫌を損ねない＞、＜気をそらせる＞であり、高齢者の情動・認知・行動に働きかけて日常生活行動を促すものであった。安心感を与える働きかけは、＜日常物品と一緒に整理する＞、＜昔を思い出させる＞、＜行動を認める＞、＜不安を鎮める＞であり、高齢者の情動・認知・行動に働きかけて高齢者の情緒安定や安心感を与えるものであった。

キーワード：認知症高齢者、介護者、働きかけ、参与観察

I. 諸 言

高齢社会を迎えたわが国では認知症高齢者の増加も著しく、2025年には300万人を大きく上回ると予測されている（厚生労働省老健局, 2003）。認知症では、脳の病変や損傷によって高次脳機能が多領域に障害され、生活環境との適応的な関係を阻害し日常生活能力の低下を招き、そのために負の心理反応（苦悩）が生じ、それらに伴って行動障害（問題行動）が発生するが多い（坂爪, 2006）とされている。このため認知症高齢者は、周囲の状況への正しい判断や対応ができにくくなり、一人で日常生活を送ることができ

にくくなるため、高齢者を取り巻く環境の調整が重要となる（坂爪, 2006）と言われている。

一方で、認知症高齢者をケアする看護師や介護者は、彼らとの意思疎通がスムーズではなく、ニーズがわかりにくいことに困難（松田ら, 2000；谷口, 2006）やストレス（張ら, 2007）を抱えており、認知症高齢者に対してネガティブな感情を抱きながらかわり（松田ら, 2006）、そのような感情を抱きながらケアすることに自己嫌悪を感じている（長畑ら, 2002）と報告されている。

しかし、これら認知症ケアは困難であるがゆえに認知症高齢者の問題行動の対処（湯浅, 2001）やケアするスタッフとケアされる認知症高齢者とのずれ（天津, 1998）などが明らかにされて

きたと言える。しかし、認知症高齢者は何もできない困った存在ではなく、認知症高齢者のニーズ(奥村, 2009)を見出し、病気の部分だけではなく、多様な人生経験や個別性をもつ人として、高齢者の生きている世界を多面的に捉えること(宮上, 2008)が必要な介護になると指摘されている。そして、介護者が認知症高齢者の能力(湯浅, 2003;堀内, 2009)に働きかけることにより、たとえ認知障害を抱えていても、有意義な日常生活を送れるのではないかと考える。

認知症高齢者に対して介護者がどのように接しているのかを調査した研究は、認知症高齢者にかかわる介護者の働きかけの仕方ではなく認知症高齢者の能力を明らかにしたもの(湯浅, 2003;堀内, 2009)や、問題行動への対処の仕方(湯浅, 2001)、介護する援助者側のストレスなどの困難感(松田ら, 2000; 谷口, 2006; 張ら, 2007)を明らかにしており、認知症高齢者へどのように働きかけているのかについて調査したもののほとんどが、看護師を対象にしている。看護師と介護士の協働に関するもの(坪井, 2005)はあるが、高齢者施設での介護の大半を担う介護士(介護福祉士、ヘルパーを含む)がどのように認知症高齢者に接しているのかを明らかにした調査は数が少ないため、認知症高齢者に対する介護者の働きかけを明らかにする意義があると考えた。

II. 研究目的

本研究の目的は、認知症高齢者の情動・認知・行動に対して介護者がどのような働きかけを行っているのかについて、認知症高齢者の介護場面を観察することから明らかにすることである。

III. 用語の定義

情動・認知・行動に対する働きかけとは、「情動や認知に働きかけてその安定や変容を図り、行動の習慣化を促すこと」(日本看護科学学会, 2005)とする。

IV. 研究方法

1. データ収集

1) データ収集期間

2008年7月と2009年2月

2) 対象施設

東京近郊の介護福祉施設Aと地方の介護老人保健施設Bの2施設を対象施設とした。

介護福祉施設Aは、全入所者数100名中、認知症ユニット入所者数は25名(1ユニットで構成)であり、14名の介護職員が3交代で介護にあっており、看護師は入所者全体を担当するため認知症フロアーには常時勤務していない。

介護老人保健施設Bは、全入所者数100名中、認知症ユニット入所者数は50名(25名ずつ2ユニットで構成)であり、17名の介護職員のほか、2名の作業療法士と看護師3名が認知症ユニットに常駐している。変則2交代制である。

3) 対象者

参与観察対象の介護職者は、調査当日、日中勤務で施設長の推薦を受け研究目的に賛同の得られた6名であった。対象者の概要は表1のとおりである。

表1 介護職の属性

施設	介護職	年齢	資格	全臨床経験年数 (うち認知症ケア経験)
介護老人 福祉施設A	A	30代	介護福祉士	8年(5年)
	B	30代	介護福祉士	8年(2年)
	C	20代	ヘルパー	4年(3年)
	D	20代	ヘルパー	3年(2年)
介護老人 保健施設B	E	30代	ヘルパー	9年(9年)
	F	20代	ヘルパー	6年(3年)

4) データ収集方法

認知症高齢者の情動・認知・行動に対して介護者がどのように働きかけているのかを探るために、本研究では参加観察法を用いた。

延べ6名の研究者が、10時から16時までのそれぞれ6時間程度(休憩は対象者に合わせ)各施設のユニットで働く介護職者を対象として参与観察を行った。参与観察の期間は、東京近郊の介護福祉施設は1日、地方の介護老人保健施設は2日の合計3日間であった。

各研究者がユニットにて、対象の介護職者が認

知症高齢者と接している時の介護職の言動に注目して観察し、経時的に事実（高齢者との会話・介護行為・高齢者の反応）と研究者が疑問に思ったこと等に分けてできるだけ細かくフィールドノートに記録した。また、参与観察中、介護職者が高齢者に接している様子の中で、どうしてそのような行動や言葉がけを行ったのかなど、確認したいことや疑問に思ったことに関して、業務終了後に各対象者に10～15分程度のインタビューを行ないその内容を書き留めた。なお、研究者間で統一した観察やインタビューが行えるように用紙を作成し、その用紙をもとに観察やインタビューを行った。

2. 分析方法

参与観察とインタビューから得られた記録から、日本看護科学学会の情動・認知・行動に対する働きかけ（日本看護科学学会、2005）を参考にして、介護職員が認知症高齢者の情動や認知に働きかけて「その安定や変容を図っている」と記述された部分や「行動の習慣化（行動がスムーズに行えている）」と記述された部分を抜きだして、その記述内容を的確に示すような言葉や短い文章に置き換えた。その言葉や短く文章にしたものを類似性にそってカテゴリー化して、そのカテゴリーにふさわしい働きかけを命名した。さらにカテゴリー間の関係性を検討して表にした。

3. 倫理的配慮

本研究は、東北福祉大学研究倫理委員会の承認を受け、各施設の責任者と研究協力者に参与観察の目的と方法、および研究協力に対する任意性と撤回の自由等の倫理性について文書と口頭にて説明をして同意を得てから参与観察およびインタビューを実施した。

また、入所している高齢者および職員に対しても調査開始時に研究目的と調査が行われていることを告知した。さらに入所者の疾患や年齢等、個人が特定されるような情報は収集しないことを約束した。なお、研究者は緊急時以外、完全な観察者の立場をとることを伝えた。

V. 結果

得られたデータを分析した結果、認知症高齢者の情動・認知・行動に対する介護者の働きかけとして、「行動を促す」働きかけと「安心感を与える」働きかけが明らかとなった。それぞれの働きかけとその実際（観察された内容）は、表2と表3である。

なお、表2、表3では具体的に認知症高齢者の情動・認知・行動に対する介護者の働きかけとその具体的な行為を説明する参与観察およびインタビュー内容を記載している。またA～Fは表1の介護職の属性と一致させている。本文中では、働きかけを<>、具体的な行為を下線にて表記した。

1. 行動を促す働きかけ（表2）

行動を促す働きかけは、<気をそらせる>、<声かけをして指示をする>、<言い方の工夫>、<機嫌を損ねない>、<できる役割を与える>であった。これらはいずれも高齢者の情動・認知・行動に働きかけて日常生活行動を促すものであった。

<気をそらせる>は、配膳時に騒ぐ高齢者に対して、お茶を飲ませ落ち着かせる様子やトイレ介助を拒否する高齢者に対して外の景色に注目するように笑顔で声をかける様子が観察された。また、爪切り中に騒ぐ高齢者に家族の話題を出して落ち着かせたり、入浴中に介護を拒否する高齢者になじみのある歌を歌うように促す様子が観察された。

<声かけをして指示をする>は、閉眼している高齢者に対して開眼するように促し状況を確認させてからトイレに誘導している様子や、他のことに気を取られ更衣がすすまない高齢者に対して声をかけて着替えることに注目させて着衣行動を促す様子や、つかまる場所を指示し安全に椅子に座れるように促す様子や、具体的に着衣行動を示しボタンの掛け違いを修正させている様子が観察された。

<言い方の工夫>は、トイレに行きたいけれどトイレがわからない高齢者に「トイレに行きたい人」ではなく、「トイレを探している人」という声かけをしたり、すぐに横になりたがる高齢者に

対してユーモアを交えながら「食べてすぐ寝ると牛になる」という諺を使い寝てはいけないと思わせる言い方で声かけをして、日中に起きていられるように＜言い方の工夫を＞している様子が観

察された。

＜機嫌を損ねない＞は、入浴を拒否する高齢者に対して＜機嫌を損ねない＞ように怒らせずに

表2 認知症高齢者の情動・認知・行動に関する介護者の「行動を促す」働きかけ

観察およびインタビュー内容	具体的な行為	働きかけ
A：自分のところに食事が運ばれてきていない高齢者が叫んでおり、介護者はお茶を差し出し、その高齢者はお茶を飲み落ち着く。	お茶を飲ませ、落ち着かせる	気をそらせる
B：「ばか」と連呼する高齢者に介護者が「ほら、雪降っているよ」というと「あたりまえだー」と叫ぶ。介護者は笑顔で対応することが大切であると思うと述べている。	外の景色に注目するように笑顔で声をかける	
E：突然「おれ、帰るんだ～」と言う高齢者に、「最近奥さん見ないね。心配だね」と声をかけると、その後は静かに爪を切ってもらっていた。	家族の話にすり替える	
E：爪切り時、高齢者は「いやだあ」と声をあげる。介護者は「歌って～」と声をかけると、高齢者は歌い始め、おとなしく爪を切らせた。	なじみのある歌を歌うように促す	
B：「目を開けて。トイレはこちですよ」と声をかけ、行動1つ1つを確認させながら具体的な指示を出している。	「目を開けて」と指示し状況を確認させる	声かけをして指示をする
E：ズボンを履く行動に進まない高齢者に意識を着替えに向けるように声をかけると高齢者は「うふふ」と笑いながらズボンを履き始めた。	着替えをすることに注目させる	
E：椅子の握り棒が分かるように「ここにつかまって」と指示をすると高齢者は迷うことなく、握り棒をつかみ椅子に座ることができた。	つかまる場所を指示する	
E：自力で着衣を進めていた高齢者に対して、介護者は、「あら〇〇さん、ボタンちぐはぐだよ。ここ、こうやってみて」と具体的な方法を示しながらボタン留めを促した。高齢者は介護者に言われたとおり、ボタンをかけ直した。	具体的に着衣行動を示す	言い方の工夫
A：介護者が「トイレ探している方？」とホールにいる利用者たちに声かけをしていると、高齢者が部屋から手を上げ出てくるため、介護者はトイレを指差し、その高齢者はトイレへ歩いていく。	「トイレに行きたい人」ではなく「トイレを探している人」と声かけをする	
B：昼食後、「私はどこでねればいいの？」と尋ねる高齢者に、介護者は「まだお昼だから寝れないよ。食べて寝たら何になるの？」と聞き、それを聞いていた周り的高齢者たちは「牛」と答え、横になりたがっていた高齢者は、その場に静かに座って過ごす。	寝てはいけないと思わせる言い方を する	
B：「嫌だ」の一点張りで拒否する高齢者のもとに、介護者が来て「だめ、もう、入ろう」というと、観念したのか「しょうがないな」と言いつつも、怒ったり拒否したりする様子もなく自分で立ち上がり介護者とともにお風呂に向かう。	怒らせずに入浴へ誘う	機嫌を損ねない
E：入浴のため、浴室まで促されて入ってきた高齢者に、介護者が「〇〇さんいらっしやい。何歳？」と声をかけると、高齢者は「いらっしやいだって…」と笑いながら「25歳だよ」と答えた。介護者は「若いね～」と返しながらか話を進めつつ、脱衣の介助をする。	話を合わせながら脱衣を介助する	
E：入浴中、高齢者に介護士が「そろそろ上がるうか？」と声をかけながら、高齢者の反応やペースに合わせて入浴を介助している。	高齢者の反応やペースに合わせて入浴を介助する	
E：入浴介助中、介護士「今日のおやつ何だったの？」。高齢者は「う～ん」と考えている様子。今度は介護士「お父さん、来た？」と問いかけ、高齢者は「来ない…」と。そんなやり取りをしながら、和やかに介助を進めている。	高齢者の関心のありそうな話をしながら入浴を介助する	
A：女性の高齢者にコーヒーの缶を手渡し、その高齢者はカップにコーヒー粉を入れ、介護者が、そのカップに湯を注ぐ。	コーヒーを入れる役割を与える	できる役割を与える
C：テーブルを拭くようにお願いをされた高齢者が、どこを拭いていいのかわかっており、介護者が拭くテーブルを指示している。	テーブルを拭く役割を与える	
B：介護者は、「お願いします」と洗濯物を高齢者にわたし、高齢者たちは洗濯物を受取り、テーブルに広げたたみ始めた。	タオルを畳む役割を与える	

入浴へ誘ったり、話を合わせながら脱衣を介助したり、また、高齢者の反応やペースに合わせて入浴を介助したり、高齢者の関心のありそうな話をしながら入浴を介助したりする様子が観察された。

＜できる役割を与える＞は、昼食時やおやつの際に、高齢者にコーヒーの粉をカップに入れる役割や布巾をわたしてテーブルを拭く役割やタオルを畳む役割を与えている様子が観察された。

2. 安心感を与える働きかけ（表3）

安心感を与える働きかけは、＜日常物品を一緒に整理する＞、＜昔を思い出させる＞、＜行動を認める＞、＜不安を鎮める＞であった。これらはいずれも高齢者の情動・認知・行動に働きかけて高齢者の情緒安定や安心感を与えるものであった。

＜日常物品を一緒に整理する＞は、洗濯物を高齢者と一緒に箆笥にしまう様子が観察された。

＜昔を思い出させる＞は、童謡を一緒に歌うことで寡黙だったり、落ち着きのない高齢者が一緒に歌詞を口ずさんだり、椅子に座って歌をきいたりする様子が観察された。

＜行動を認める＞は、「がんばれないよ」と悲観的に叫んでいる高齢者に対して「がんばって」ではなく、「がんばっているよ」と声かけをする様子が観察された。

＜不安を鎮める＞は、ケア時に過呼吸になる高齢者に対して、深呼吸を促す様子が観察された。

表3 認知症高齢者の情動・認知・行動に関する介護者の「安心感を与える」働きかけ

観察およびインタビュー内容	具体的な行為	働きかけ
F：介護者が、高齢者に洗濯ものを見せながら収納することを説明して実施している。	一緒に洗濯物を箆笥にしまう	日常物品を一緒に整理する
A：介護者は高齢者をホールに集め、童謡などの歌を一緒に歌う。高齢者は昔の歌や童謡のリズムを聞くと、歌詞を口ずさみ、それに関連した会話も成立している。また、うろうろしていた高齢者も落ち着いて椅子に腰掛け、一緒に歌を歌ったり介護者の声かけに反応し応答したりしている。	童謡を一緒に歌う	昔を思い出させる
B：トイレにて排便中の高齢者が、自力で排便しようとしており、介護者が「がんばって」と声をかけると、高齢者は「がんばれないよ。」と拒否的に叫ぶ。しかし、介護者は「がんばっている」と数回、声かけをし、排泄が済んだ高齢者がトイレ個室から出てくる。	「頑張っている」と言う	行動を認める
B：介護者が高齢者を便器に座らせようとするとき高齢者はハアハアとした息づかいをしはじめる。その様子を見ていた介護士が「～さん、深呼吸、深呼吸」と声をかける。この高齢者は、不安があると呼吸が荒くなることがあるようなので、目をつぶってとか、深呼吸をしてといったように促し不安を鎮めるようにしているとのこと。	深呼吸を促す	不安を鎮める

VI. 考 察

1. 認知症高齢者の残存機能への働きかけ

介護者は、＜言い方の工夫＞、＜声かけをして指示をする＞、＜できる役割を与える＞などの働きかけを行っており、すべて介護するのではなく高齢者の残存機能へ働きかけていたと考える。＜言い方の工夫＞や＜声かけをして指示をする＞ことによって、認知症高齢者の日常生活がスムーズに行えるよう行動を促し、さらに＜できる役割を与える＞ことによって、認知症高齢者の残存機能の低下を防ぐのと同時に、自尊心の低下も防いでいたのではないかと考える。

認知障害のある人が本来ある力を使わなければ、その能力を低下させ、反対に認知症患者の残存能力に適切に働きかければ、できる能力を本来のレベル以下に低下させてしまうのを防ぐだけではなく、低下した能力を本来のレベルに回復させることも可能である（Pam, 1993/2002）と指摘されている。そのため認知症高齢者のできない側面だけを強調するのではなく、できる能力、つまり残存機能を見極め、できる能力に適切に働きかけることによって、認知症高齢者の日常生活行動の習慣化を促し支援することがケアとして重要だと言える。

2. 認知症高齢者を安心させる働きかけ

今回、介護者が認知症高齢者に対して安心を与えるような働きかけが観察された。認知症を生きる高齢者は、物忘れを自覚したり、がまんや混乱、寂しいと感じていたりする（高山ら, 2000）ため、行動を促すためには安心させるような働きかけが必要であると考えられる。

現在、認知症ケアの新しいパラダイムとして、パーソンセンタードケア、すなわちその人らしさを尊重しその人を中心としたケアが理論的に明らかになっている（Kitwood, T., 1997 / 2005）。その中に“認めること”や“遊び”や“リラクゼーション”など10項目のパーソンセンタードケアにおける前向きな働きかけが提唱されている。今回の観察で明らかとなった、＜行動を認める＞や＜不安を鎮める＞などの安心感を与える働きかけは、認知症高齢者の情緒を安定させていると言

える。

さらに認知症高齢者の残存機能に働きかけ行動を促す際にも、認知症高齢者の情緒の安定を図り介護拒否や興奮状態などの問題行動に対処することが必要だと言える。今回、入浴を拒否したり介護中、興奮しそうな高齢者に対して、＜機嫌を損ねない＞、＜気をそらせる＞ような働きかけを行い、興奮や拒否をうまくかわして介護する様子が観察された。入浴行動をはじめ認知症高齢者が拒否する介護や興奮状態などの認知症患者にたびたびみられる周辺症状は、介護するうえで問題になることが多い。認知症に伴う問題行動（周辺症状）に対する具体的なケアを明らかにすることが、認知症高齢者や介護者のQOLを高める（坂爪, 2006）との指摘もあるように認知症高齢者の情緒の安定を図ることが、高齢者の行動を促すにおいても重要なことであると言える。

研究の限界

本研究は、延べ6名の研究者が2つの施設で、合計3日間、日中に観察できた内容のみをデータとしているため観察内容や、認知症高齢者に対する介護者の働きかけの内容に限界があることは否めない。

VII. 結 論

認知症ユニットで働く介護者が高齢者に対してどのような働きかけを行っているのか、その実際を観察した結果、認知症高齢者の情動・認知・行動に対する介護者の働きかけには、行動を促す働きかけと安心感を与える働きかけが明らかとなった。認知症高齢者の残存機能を高める働きかけと情緒の安定を図ることが、介護者の働きかけとして重要であると考えられる。

謝 辞

本研究にあたり参与観察を快く受け入れてくださった施設・職員・認知症高齢者の皆様に心から感謝いたします。

なお、本論文は、東北福祉大学認知症ケア看護・介護統合化研究会（小笠原浩一代表：みずほ教育福祉財団助成研究）の研究成果の一部であり、第

14 回日本老年看護学会学術集会および第 31 回日本看護科学学会学術集会にて発表いたしました。

文 献

- 天津栄子, 中田まゆみ (1998): 老人保健施設における痴呆老人とケアスタッフの相互作用にみられる特徴, 老年看護学, 3 (1) 52-63.
- 張允楨, 長三紘平, 黒田研二 (2007): 特別養護老人ホームにおける介護職員のストレスに関する研究～小規模ケア型施設と従来型施設の比較, 老年社会科学, 29(3),366-374.
- 坂爪一幸 (2006): 認知症の非薬物療法 精神療法・認知行動療法, 老年精神医学雑誌, 17, 718-727.
- 堀内園子, 堀内昭彦, 石井法子 (2009): アルツハイマー病の人の能力を引き出し, 維持・強化する看護の現状と課題, 看護技術, 55 (7), 49-55.
- Kitwood,T.(1997)／高橋誠一訳 (2005): 認知症のパーソンセンタードケア 新しいケア 文化へ, 6 - 15,190-195, 筒井書房, 東京.
- 厚生労働省老健局 (2003): 高齢者介護研究会報告書, 2015 年の高齢者介護.
- 松田千登勢, 佐瀬美恵子, 長畑多代, 他 1 名 (2000): 認知症高齢者の問題行動の経験頻度とその認識について～老人保健施設の職員へのアンケート調査による解析, 大阪府立大学看護学部紀要, 6(1),41-49.
- 松田千登勢, 長畑多代, 上野昌江, 他 1 名 (2006): 認知症高齢者をケアする看護師の感情, 大阪府立大学看護学部紀要, 12(1),85-91.
- 宮上多加子 (2008): 高齢者福祉施設職員の認知症ケアに関する認識の変容プロセス～初任介護職員に対するインタビューの分析を通して, 高知女子大学紀要, 社会福祉学部編, 第 57 巻, 1-13.
- 長畑多代, 松田千登勢, 佐瀬美恵子, 他 1 名 (2002): 介護老人保健施設で働く看護婦の痴呆性高齢者とその言動に対するとらえ方, 大阪府立大学看護学部紀要, 8(1)19-27.
- 日本看護科学学会 第 6 期・第 7 期看護学学術用語検討委員会編集 (2005): 看護行為用語分類, 017, 日本看護科学学会, 東京.
- 奥村朱美, 内田陽子 (2009): 介護老人保健施設入所中の認知症高齢者のニーズの特徴, 老年看護学, 13 (2) , 97-103.
- Pam Dawson, Donna L. Wells, Karen Kline(1993)／山下美根子 (2002): 痴呆性高齢者の残存機能を高めるケア (1), 医学書院, 東京.
- 高山成子, 水谷信子 (2000): 中等度・重度痴呆症高齢者が経験している世界についての研究, 老年看護学, 5(1) , 88-95.
- 谷口好美 (2006): 医療施設で認知症高齢者に看護を行ううえで生じる看護師の困難, 老年看護学, 11 (1) , 12-20.
- 坪井桂子, 西田真寿美, 成清美治 (2005): ユニットケアに取り組む特別養護老人ホームの看護職と介護職の協働と教育, 岡山大学医学部保健学科紀要, 15, 51-62.
- 湯浅美千代, 小野幸子, 野口美智子 (2001): 老人痴呆症の問題行動に対処する方法, 千葉大学看護学部紀要, 第 23 号,39-45.
- 湯浅美千代, 野口美智子, 桑田美代子, 他 1 名 (2003): 痴呆症状を有する患者に潜在する能力を見出す方法, 千葉大学看護学部紀要 第 25 号, 9-16.